絵と写真で見る嫁ヶ島の変遷

吉 田 薫

数年前から松江市の今岡額縁店により明治時代から昭和時代初期の松江の絵葉書が復版・販売されている。この中に嫁ヶ島の写真もあり、その変遷の姿を追うことができるようになったのでここに紹介する。なお、一部を除き、明確な撮影時期は不明である。

嫁ヶ島

嫁ヶ島は宍道湖に浮かぶ唯一の島で、宍道湖東端より 200m ほど離れ、松江城天守閣のほぼ 真南に位置し、宍道湖の風景の画龍点睛、絶妙なアクセントとなっている。島の大きさは、東西方向に長く 110m、幅が 30m、周囲 240m ほどである。今、大きな松が 30 本ほど生えているが、これは昭和の初め、松江出身の総理大臣、若槻礼次郎の発案により植えられたものである。



写真-1 合銀ビルより眺めた嫁ヶ島周辺。対岸が夕日スポット、円空のある建物島根県立美術館。

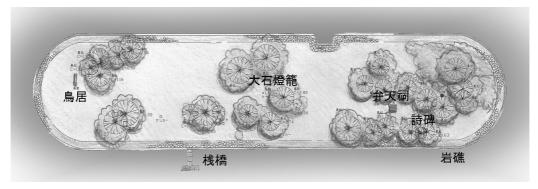


図-1 現在の嫁ヶ島の平面図(提供:エム環境設計室)

島の東端には琵琶湖疏水の設計者、田邊朔郎博士により明治40年(1907)に献納された石の鳥居があり、中央部には島根県の収税長をしていた金子直により明治36年(1903)に寄進された大石燈籠、西側には江戸時代初頭(1611)に勧請された弁天祠と、明治・大正期の漢詩人・永坂若埭作の詩碑が建っている。島の東南部には波除けのために石臼型の来待石(凝灰岩質砂岩)製の如泥石が設置されている。

東端の鳥居と、対岸の宍道湖夕日スポットを結んで水中参道がある。水中の尾根を、江戸時代以降に歩きやすいように整備したものと思われる。

西端には、1200万年前に噴出したとされる黒色の玄武岩の岩礁がある。これが嫁ヶ島の基岩である。過去の写真を読み解くとき、この岩礁が一つの目印となる。



写真-2 琵琶湖疏水の設計者、田邊朔郎博士 献納の石の鳥居



写真-3 1200 万年前にできたといわれる玄 武岩の岩礁

島の姿の変遷

嫁ヶ島は、奈良時代の733年に完成した『出雲国風土記』に較်島という名で記載されている。「野代の海の中に蚊島あり。周り六十歩あり。中央は涅土にして、四方は並びに礒なり。中央に手掬許りの木一株あるのみ。其の礒に螺子・海松あり」。当時、宍道湖は入海(海水)であり、嫁ヶ島は周囲が約 110m と今の半分ほどの大きさで、島の中央には径 $7\sim8cm$ ばかりの木が一本生え、礒には貝や海草が見られたとある。地形やその後の絵図から推察すれば、現在の西半分であったと思われる。ちなみに現在の宍道湖は、海水が 10分の 1 ほど混じった汽水湖である。



写真-4 江戸時代(不詳)出展:白潟天満 宮祭礼図

江戸時代の嫁ヶ島は、風土記時代と基本的には変わらない。島の西側には、恐らく松を主体とした樹木が茂る。写真-4において、鳥居と小祠の他、間に 2 基の燈籠が描かれている。島の周囲には岩礁が見られる。



一末:秋日雪

写真-5 江戸時代(丁未年···1847?) 出展:加茂H家絵図



写真-6 明治 40 年 5 月 (出展:今岡商店絵葉書)

写真-5 の山水画も江戸時代の作と思われる。丁未年秋日寫とあるので、1847 年が該当する。明治 40 年(1907) の可能性もあるが、舟の人物の服装、明治 36 年建立の大石燈籠や明治中期に移転してきた石灰地蔵が描かれていないことなどより、素直に解釈すれば江戸時代となる。袖師地蔵、中央部の樹木(桃?)、岩礁など細部が描かれていることから判断すると、写実の可能性が高い。

明治23年~24年(1890-1891)にかけて文豪ラフカディオ・ハーンが松江に住むが、巨大な松が影差す小祠のある細長く美しい小島と表現し、唐獅子が冬の間の荒い波風により倒されたことと、ひき臼形の石(如泥石)の防塁があることを記している。

写真-6は、明治 40 年 5 月の皇太子(後の大正天皇) 行啓の時の様子である。この年の 3 月に完成した鳥居の近くには国旗が組まれ、万国旗が飾られている。湖面には幾艘もの舟が浮かび、夕日の下の位置に、島から離れた岩礁がある。



写真-7 明治 40 年代 (出展:今岡商店絵葉書)

写真-7は、大石燈篭が写っているので、明治36年以降である。岩礁が島から離れた位置にあること、地蔵の手前に山陰本線のための護岸(明治42年11月、松江~宍道間開通)がないことより、大正の大改修以前の明治40年代と私は見るが、明確なことは分からない。



写真-8 明治 40 年代(出展:今岡商店絵葉書)

写真-8 は、石の鳥居が建立されて間もない頃である。鳥居の質に石が載せられているので、常識的に判断すれば皇太子行啓後、 $1\sim2$ 年経った頃か。鳥居の手前にも水面が見え、葦が生えている。島がこのように侵食されたために大改修が行われることになったのかもしれない。



写真-9 大正初期(出展:今岡商店絵葉書)

写真-9 は、(明治末~) 大正初期の大改修直後の姿である。島の内側から東南方を望んだもので、水際部には新しい如泥石が積まれている。右端の方は 2 段積みとなっている。

現在の島の原形を形成したこの時の護 岸工事は、芥川龍之介らから大批判を受 けることとなる。

写真-10、11 は、如泥石を設置した後の風景である。西側の岩礁が島とほぼつながっている。井川 素 (後の大阪市立大学初代学長、恒藤恭)は大正 2 年 (1913)の松陽新報において、如泥石が設置されたことに対し、「この湖の礼儀にかなわぬ無作法漢」、「4、5 本の松が小さな祠を護り、白い砂浜のはてに青葦が波に揺れる様こそ趣があった」、「やさしい島の面影が滅びてしまった」と憤慨している。井川を頼って来遊した芥川龍之介も『松江印象記』で、「防波工事の目的が、波浪の害を防いで嫁が島の風趣を保存せしめるためであるとすれば、かくのごとき無細工な石がきの築造は、その風趣を害する点において、まさしく当初の目的に矛盾するものである」と酷評している。水際部が際立ったことで自然らしさが失われてしまったのである。



写真-10 大正時代(出展:今岡商店絵葉書)



写真-11 大正時代(出展:松江郷土館) 松 江市立図書館便り「ちどり」より転載



写真-12 は前の写真とほぼ同様な姿だが、大石燈篭の右側に同程度の高さの松が見えるところが異なる。

写真-12 大正~昭和初期(出展:今岡商店絵葉書)

この頃の平面図が図-2である。鳥居、大石燈籠、弁天祠、詩碑の他に、西側に松が6本と燈籠のそばに小松が1本ほど描かれている。島は小判型に整形され現在とほぼ同様だが、南側は浸食されたのだろうか、水面が入り込んでいる。

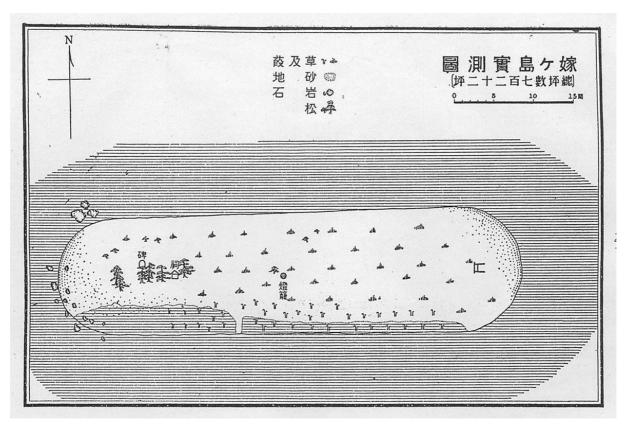


図-2 大正~昭和初期の平面図



写真-13 昭和5年11月(出展:園山書店)山陰中央新報より転載

写真-14 (出展:園山書店)松江市 立図書館便り「ちどり」より転載

写真-13、14 は、昭和 5 年に松江出身の総理大臣の若槻礼次郎が渡島した時のものである。 大石燈籠の隣の松が、ほぼ 2 倍の高さに生長している。鳥居の左側にも小さな松が見える。昭

和9年頃、若槻は松が2本枯れたことを知り、島根町 多古の海岸から松の苗木20本を取り寄せて植えさせ、 その後、意を継いだ料亭・魚一が松苗を個人で購入し て植えたという。

嫁ヶ島が現在のような姿となったのは昭和 56 年~57 年 (1981-1982) の護岸工事による。この時に如泥石が2列に並べられ、1m高の護岸と盛土が施工された。護岸の材料には大根島産の島石(嫁ヶ島基岩よりも航理の粗い玄武岩)が用いられた。



写真-15 昭和56年~57年の護岸工事・・・丸い石が如泥石

夕日と嫁ヶ島

宍道湖は夕日が美しいことで知られる。平成19年(2007)に国道9号沿いに夕日スポットができてから、夕日を観賞する人の数がかなり増えたようである。天気のいい夕暮れ時の30分間はカメラマンや観光客で賑わう。宍道湖の夕日には、嫁ヶ島が不可欠である。季節により観賞者の立つ位置が移動するのは、嫁ヶ島を添景とした夕日を見るためである。



写真-16 宍道湖の夕日(秋)



写真-17 夕暮れ時のにぎわい

嫁ヶ島の謎

私は、一昨年より松江開府 400 年祭の一環で、「嫁ヶ島風景ガイド」を引き受けている。今までに、延べ数千人に対して数百回は同じ説明を行った勘定となる。通説を繰り返し口にしていると、自分の説明ながら疑問が湧いてくる。

弁天祠は江戸時代初頭に勧請されたのだが、神々の国・出雲において、このように美しく目立つ島が江戸時代に至るまで神仏と無縁だったのだろうか。なぜ「蚊島」と名づけられ、何がもとで「嫁ヶ島」に転じたのだろうか。

島が大国主命を祀る野代神社の境内地であることとも整合がとれる。この神社は、もともと 田和山の麓にあったともいわれる。ここに謎の多い田和山遺跡がある。山頂で三重の環濠や多 数のつぶて石が見つかっているが、規模が小さく実戦に役立つとは考えられないことや住居跡

が環濠の外にあることなどの説明がつかない。田和山を戲(むれる)山と解釈し、すべてを小さくつくった少彦名命を記念した古代の娯楽施設(訓練あるいは奉祀施設)ではないか、と想像を逞しくして山頂に登れば、果たして嫁ヶ島の西半分(元々の島の範囲)がピンポイントで眼下に見える。

少彦名命は、前述の栗島の他、大橋川 の塩盾島や北島国造家庭園の小島でも祀 られている。「小島には功績のあった小さ な神が祀られた」という仮説はどうだろうか。



写真-18 田和山山頂から眺めた嫁ヶ島

おわりに

本稿は、現時点で入手可能な絵図や写真に基づいている。見解を改めることはやぶさかでないので、読者諸氏において異論があればご指摘をいただき、また有用な写真や情報があれば提供をお願いしたい。小島の祭神についても同様である。

(E-mail : fukei-ke@icv.ne.jp)

参考資料:

■ スクナビコナ

スクナビコナ (スクナヒコナとも。少名毘古那神、少彦名神、少御神) は、日本神話における神。古事記では神皇産霊神 (かみむすびのかみ) の子とされ、日本書紀では高皇産霊神 (たかみむすびのかみ) の子とされる。体が小さくて敏捷、忍耐力に富み、大国主と協力して国土の経営にあたり、医薬・禁厭などの法を創めたという。

日本神話では、素戔鳴尊の直系の血を引く国津神の王・大国主が出雲国の美保岬にいた時、海の向こうから小さな船が彼に近づいてきた。そこには蛾の皮を着た極めて小さな神が乗っていたという。それがスクナビコナである。そしてそれを機にスクナビコナは大国主と兄弟の契りを結び、国津神の仲間となり、彼らの国を助けたという。しかし国造りが終わらぬ半ばでスクナビコナは粟の茎にはじかれ、海の彼方にあるとされる常世の国に去って行ったという。その後を引き継いだのが大物主とされる。

一説にはスクナビコナは知恵の神であり、一説にはスクナビコナは中国古代の強力な方士 (幻術士) だったともいわれ、特に医療、医薬の知識は非常に優れたものだったという。神 功皇后も歌で讃えたように、醸造の神としても知られる。別名を生根神(生根神社参照)と する説もあり、活津彦根命と関係がある様である。淡島神や玉津島明神と同一とする説もあり、男性でなく、女性であるとする説もあり、謎が多い。

Wikipedia より